

氏名	呂 帥 <small>ろ せい</small>
学位の種類	博士（観光学）
報告番号	甲第480号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	大都市近郊における農村観光の発展とルーラリティの関係 —上海市崇明区前衛村を事例として—
審査委員	(主査) 杜 国慶 (立教大学大学院観光学研究科教授) 佐藤 大祐 (立教大学大学院観光学研究科教授) 舩谷 鋭 (立教大学大学院観光学研究科教授) 張 貴民 (愛媛大学教育学部教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文の構成

図一覧

表一覧

写真一覧

要約

#### 第1章 序論

##### 第1節 研究背景

1. 中国における農村観光の発展
2. 中国におけるルーラリティの再編

##### 第2節 先行研究

1. 農村観光の概念
2. ルーラリティの概念と特徴

##### 第3節 研究の目的と枠組み

1. 大都市近郊の農村観光地
2. 本研究の目的
3. 本研究の枠組み

##### 第4節 研究対象地域の概要

#### 第2章 生産空間の観光化とルーラリティ再編

##### 第1節 土地利用の分類

##### 第2節 土地利用と農業の機能変化

1. 伝統的な土地利用と農業機能
2. 観光萌芽期（1991～98年）
3. 観光展開期（1999～2003年）
4. 観光拡大期（2004～10年）
5. 観光停滞期（2011年以降）

##### 第3節 観光活動とルーラリティの関係

1. 農業生産におけるルーラリティとローカリティ
2. 建築物の伝統性と現代性
3. 文化景観の再構築におけるルーラリティ再編と伝統維持
4. 都市的観光施設の侵入

##### 第4節 まとめ

#### 第3章 生活空間の観光化とルーラリティ再編

##### 第1節 農家楽経営の台頭と拡大

1. 農家楽経営の経緯
  2. 農家楽の分布
  3. 農家楽経営規模の特徴
- 第2節 人の変化
1. 村民の変化
  2. 観光者の増加
- 第3節 居住空間の変化
1. 住宅外観の変化
  2. 間取りと内装の変化
  3. 居住習慣の変化
  4. 庭の変化
- 第4節 集落景観の変化
1. 建築景観の商業化
  2. 道路景観の変化
  3. 公共空間の再構築
- 第5節 まとめ
- 第4章 社会関係にみるルーラリティ再編
- 第1節 職業と収入構成の変化
1. 職業構成
  2. 家庭の収入構成
- 第2節 人間関係の変化
1. 村民関係
  2. ホストーゲスト関係
  3. ソーシャル・ネットワーク
- 第3節 生活習慣の変化
1. 勤務時間
  2. 技術の習得
  3. 村民の余暇活動
- 第4節 村の管理と運営の変化
1. 管理者
  2. 管理方式
- 第5節 まとめ
- 第5章 結論
- 第1節 前衛村におけるルーラリティ再編の特徴
1. 生産空間のルーラリティ再編
  2. 生活空間のルーラリティ再編

### 3. 社会関係のルーラリティ再編

#### 第2節 農村観光発展とルーラリティ再編のメカニズム

#### 第3節 本研究の意義

参考文献

謝辞

索引

#### (2) 論文の内容要旨

本論文は、上海市近郊の農村観光地である崇明区前衛村を事例に、その生産空間、生活空間、社会関係におけるルーラリティの変化について考察することで、農村観光の発展とルーラリティ再編の関係性、およびルーラリティの変化メカニズムについて明らかにする。論文は第1章「序論」、第2章「生産空間の観光化とルーラリティ再編」、第3章「生活空間の観光化とルーラリティ再編」、第4章「社会関係にみるルーラリティ再編」、第5章「結論」の5章から構成されている。

序論では、本研究の背景と目的、方法を述べ、先行研究を整理する。中国において、経済の向上と余暇時間の増加により、観光業は著しく発展している。それに加え、都市住民の自然環境に対する意識の向上や労働ストレスの解消が求められるようになったことを背景となつて、農村観光に対する需要が高まっている。農村観光の発展に伴い、農村観光商品の中心的でユニークなセールスポイントと認識されているルーラリティも変容している。先行研究の整理を通じて、農村観光を広義に「農村地域におけるすべての観光活動である」と定義し、ルーラリティについては先行研究の定義を援用して「農村的要素や農村らしさの諸相」と捉える。

ルーラリティの変化とその要因について考察していくために、先行研究で議論されている様々なルーラリティの指標とその特徴を考察した。農村観光の発展において、各指標の変化はそれらの特徴が維持される場合、ルーラリティの維持とされ、特徴と異なる方向に変化する場合は、ルーラリティの低下と判断する。ルーラリティの維持には、村に従来存在しなかった施設が造られた場合、新規ルーラリティと判断する。また、地理学が空間を扱う学問であることに基づき、本研究は生産空間と生活空間、社会関係の3つの側面から研究の枠組みを構築する。研究対象については、農村観光が大都市近郊に発達しやすいことと近郊の農村においてルーラリティの衰退と維持のせめぎ合いが著しいことを踏まえ、上海市近郊に位置し、農業生産を主な産業とした状態から農村観光地へ成長してきた崇明区前衛村を事例とする。

第2章では、前衛村の生産空間における観光施設の展開実況を把握したうえで、土地利用と観光対象におけるルーラリティの強弱の変化を考察し、その変化と農村観光発展の関係について分析する。結果、以下の3点が明らかになった。

第一に、土地利用と農業機能の変化からみると、前衛村における農村観光の発展に伴い、萌芽期には従来の農業生産にいて補助的な存在にしか過ぎなかった観光機能が、村の主要な機能へと転換していた。農林漁業の農的な用地が観光に利用される一方、多様な人工的な観光施設の導入によって、農村地域の農的な用地が都市的な用地へ転換しつつあり、土地利用におけるルーラリティは低下していた。

第二に、農業生産の観光化を分析すると、前衛村では1990年代から発展してきた生態農業の展開により、その観光機能が認識され、後に農村観光発展の契機となった。当初、村が生産していた新鮮かつ安全な野菜は重要な観光アトラクションとして都市住民に受け入れられた。生産空間における観光機能の強化により、生産物がローカルな農産物からイチゴやブドウなど従来栽培されていなかった商品性の高い農産物やハーブといった景観作物へ転換した。これは新規ルーラリティの出現と理解できる。一方、従来の農産物も景観形成のためにある程度残されており、ルーラリティの維持に寄与していた。

第三に、人工的な観光施設に関しては、遊園地や博物館、テニス場など都市的な観光施設の出現によってルーラリティが低下する一方、伝統的な生産・生活文化を活用して建設された施設は、その「伝統的」という特徴から新規ルーラリティと認められる。このように、生産空間の観光化に伴い、ルーラリティは農村の土地利用類型と農業機能、および生産空間の景観と相互に影響し合いながら変化している。

第3章では、前衛村の生活空間における農家楽経営の展開に伴い、居住空間と集落景観におけるルーラリティの再編を解明し、その変化と農村観光発展の関係について明らかにする。結果、以下の4点が明らかになった。

第一に、従来の研究では、農村建築におけるルーラリティは「伝統的」、「古い」、「小規模」であることが特徴とされてきた。しかし、農村地域における経済向上を背景に、住民の生活空間を改善する需要が高まったため、新しい家屋を建造するケースが多くなった。こうした住宅におけるルーラリティの再編は、生活空間観光化の前提となった。また、農家楽経営によって経済がいつそう向上したため、建設された西洋風「別荘」住宅は一部の観光者に対してアトラクションになっていた。この西洋風別荘は現代の大都市には比較的に少ない特徴であり、農村環境の優位性を表しており、新規ルーラリティとして出現した。

第二に、農家が自宅の空き部屋を活用して観光者に宿泊を提供することで、生活空間における観光化が始まってきた。しかし、現代的な生活設備の欠如は都市からの観光者を満足させることができなかった。農村観光の進展により、観光者のアメニティ需要と政策規制、政府の改善指導により、部屋の内装や間取り、設備が都市部の宿泊施設並みに整備された。これらの変化により、生活空間におけるルーラリティが低下した。一方で、このようなアメニティ改善は、受け入れ環境の整備という面で農村観光の発展にポジティブな影響を与えるものでもあった。なお整備の後も、かまどのような農村の特徴を持つ設備が残されており、農村の雰囲気を保ち、ルーラリティの維持にある程度貢献している。

そして、より多くの観光者を受け入れるため、一部の経営者が菜園だった中庭を利用し

て新しい建物を増築し、経営規模を拡大する動きも現れた。この増築による庭の農村景観が減少しルーラリティを低下させたことは、農村観光にネガティブな影響を与えている。

農家楽経営を背景に、家屋には広告看板が立てられ、また観光客の利便性のために路標や街灯、ごみ箱などが設置されたが、これらは集落景観におけるルーラリティを低下させている。一方、農村住民が綺麗と感じる都市部の街路樹も村に導入され、従来の街路樹と共に新たな農村風景を創り出した。

第4章では、生産空間と生活空間における観光化の進展に伴い、社会関係の要素である就業・収入構成と人間関係、生活習慣、村の管理などにおいて生じたルーラリティの再編と農村観光発展の関係を分析した。結果、以下の4点が明らかになった。

第一に、前衛村において、農村観光の発展に伴って、現在、全ての土地が村に統一管理され、農業を営む村民はいなくなった。それゆえ、村からの補助金の他に、観光関連産業による収入がメインとなった。この面でルーラリティの低下が著しい。これは生活空間と生産空間における観光化の結果であるが、このような収入構成であるゆえに、村民が観光業の発展を強く希望し、内部からの農村観光を推し進める原動力となる。

第二に、人間関係の側面では、伝統的で親密な村民関係において、とくに農家楽経営の競争により、トラブルが頻発するようになった。一方、従来の地縁・血縁関係に基づいて、経営者の間に観光客の宿泊を「紹介」する形式も現れた。これは農村観光の発展における従来の人間関係に新しい特徴が出ていると理解できる。また、農村における伝統的な道徳や習俗に基づいて、来客に親切に対応することはルーラリティの一つでもあり、都市住民にとって魅力的な存在になっている。しかし、観光者が増加してくると、親密的なホスト・ゲスト関係に経済関係が強くなり働き、従来のパーソナルな人間関係はアノニマスな関係へと転換していく。一方、村民と観光者の接触は閉鎖的な農村社会を打破するものでもあり、経済関係に基づいた新しいソーシャル・ネットワークも次第に形成されてきた。

第三に、従来、農村では伝統的な農業生産のスケジュールに基づいて村民の生活リズムや農時期が規定されており、勤務規則に厳しく規定された生活をおくる都市住民にとっては自由度が高く感じられ、農村の魅力の一つとなっていた。しかし、村の産業転換に伴い、村民の就職構成が変わり、日常生活のリズムも観光産業に影響されて変化した。これは生活習慣におけるルーラリティの低下であろう。

第四に、観光化以前、村内部の権力構造は体制エリートの村幹部と一般村民によって構成されていたが、観光産業の発展による経済力の向上を背景に影響力を有する非体制エリートも出現した。それゆえ村の管理がより複雑になり、経済管理や企業運営の能力が必要とされるようになった。実際に村ではそれらの管理要素が導入されたものの、管理者の権威不足や村民の素質低下などが理由で、村の発展施策を適切に実行することができない事象も発生している。

第5章では、前衛村における農村観光の発展とルーラリティの再編を、生産空間と生活空間、社会関係の3つの側面から要約してまとめる。この3つの側面において、各要素の

ルーラリティ再編が相互に作用しながら展開することで、関連が強固であることが確認できる。

以上のように大都市近郊における農村観光の発展とルーラリティの再編のメカニズムをまとめ、最後に本研究の意義は動的にルーラリティを考察することと、ルーラリティ再編を解明すること、農村観光とルーラリティの関係を考察することと述べる。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

本論文は、中国上海市近郊の農村観光地である崇明区前衛村を事例として、農村の生産空間、生活空間、社会関係から農村観光の発展とルーラリティとの関係を解明することを目的とした。まず日本語、中国語、英語の先行研究のレビューを通して、ルーラリティなど重要用語の定義づけ、および農村観光研究とルーラリティ研究への本論文の位置付けがなされた。筆者は前衛村で2014年3月と2015年3～4月に現地調査を実施して独自のデータを収集し、それをもとに前衛村の観光発展過程を萌芽期(1991～98年)、展開期(1999～2003年)、拡大期(2004～10年)、停滞期(2011年以降)に時期区分した上で、ルーラリティの変化を生産空間と生活空間および社会関係から検討した。生産空間では、観光の要素の展開状況を把握するために、生産作物と土地利用の変化が分析された。その結果、生態農業の発展が都市住民を引き付け、農産物を中心要素とする農村観光が始まったこと、観光業の拡大に伴い非農的な観光施設までもが整備されるようになったことが判明し、ルーラリティの大幅な再編が確認された。生活空間では、宿泊需要の増加と嗜好の変化に対応するために、村民が自宅を改築した農家楽を観光者に提供したことが分かった。社会関係では、村民の収入や職業構成が観光業への依存度を増すことで、村内の人間関係やホストゲスト関係、村の管理と運営においても観光業の推進を軸とする関係性が出現した。つまり、農村観光の発展と共に、ルーラリティは住民によって再編され、需要や嗜好によって都市的・西洋的要素とも融合され、農村の社会関係や住民自身にも変容を強いることとなった。以上のような現代中国の農村観光とルーラリティとの動的な関係が本論文によって明らかとなった。

### (2) 論文の評価

本論文は大都市近郊の農村観光とルーラリティの関係を扱った、中国における観光地理学研究として貴重な成果である。農村観光の核心と位置づけられるルーラリティに着目し、農村の生産空間と生活空間、社会関係の三つの側面から農村観光の発展とルーラリティの関係を実証的に解明したことは、これまでの観光研究の蓄積に新たな貢献を加えるものとして高く評価できる。とりわけ、農村観光発展過程の時間軸と農村の生産・生活の空間軸に加えて、社会関係の変化をも分析したことは本論文の優れた特質である。さらに、先行研究レビューを通して編み出した研究の枠組みは安定しており、方法もインタビューや定点観察などの1次データに基づき独自性・信頼性が高く、研究の価値を高めたことも付記しておきたい。



審査会では、ルーラリティの主体とローカリティの判別、事例地域の選択への指摘や、日本の農村観光から得られる示唆とそれを踏まえた今後の課題が示されたが、これらは本論文の研究上の貢献を損なうものではなく、本論文の成果をより精緻化し発展させていく方向性をもつものと判断した。審査委員は、本申請論文の観光研究としての独自性と研究上の貢献を高く評価し、博士の学位に相当するとの見解で一致した。